

学びを選ぶ学びをつくる

シユタイナー学校の1年

独自の模様描き

絵から漢字、平仮名へ

第2回

4月の入学式直後の最初の授業で、これまで体をつくっていた力が世界に向かつていくことを表すという、直線と曲線を描いた横浜シユタイナー学園の1年生。「フォルメン」と呼ばれるもので、いわば模様描きだ。シユタイナー教育独自の必修授業の一つとして位置付けられている。公立小学校の1年生は国語の時間に、これからの学習の基礎となる平仮名を習っている真つ最中だ。学園の1年生たちはどのように文字を学んでいくのだろうか。校舎前の桜並木に若葉が映える5月、学園を再訪した。

スロースタート

毎日午前の1、2時間目に当たる100分、3〜4週間続けて同じ教科を学ぶという「エポック授業」の予定表を見せてもらった。予定表では、1年生の4月は「フォルメン」、5月は「漢字」、6月に「数」を学び始め、同月下旬から「平仮名」がようやく始まる。つまり、学園の1年生はこれまで、ひたすら模様描きを続けていたわけ、やつと漢字を学び始めたところだ。公立学校では既に初日から学んでいる平仮名については、学園

の1年生は全く習っていない。

多くの公立小学校では入学後、1日1文字ずつ、「つ」「く」「し」など画数の少ない書きやすい文字から始まり、1学期中には平仮名50音の学習を終える。進度の早い私立小学校では、5月中旬に終えるところもあるという。入学説明会で「自分の名前を平仮名で書けるようにしておいてください」と求める学校も多い中、学園のスロースタートぶりは対照的だ。

それにしても、学園の1年生が貴重なスタートである4月いっぱい取り組んできたというフォルメンとは、一体どんなものなのか。

フォルメンとはドイツ語で形を意味する。「エポックノート」と呼ばれるA4判のスケッチブックに、蜜ろうクレヨンで模様を描く練習だ。「文字、図形は全て直線と曲線だけでできています。このシンプルな分類を最もシンプルに体験する時間がフォルメンです。文字や図形の文化、線描文化の『いろはのい』をまず学校で学びます。それがだんだん、子どもたちの学ぶ力、空間感覚、手の巧緻性を養うことになる。物事の機微、間合い、フォルメンには文字を覚える前の、とても豊かな

学びの工程がたっぷり含まれています」と説明してくれたのは、学園1期生である8年生(中学2年生)担任の長井麻美先生(51)だ。

長井先生によると、フォルメンは文字、図形の基本となる直線と曲線をさまざまにアプローチで体験させることで、低学年では文字、高学年では幾何学を導入するための準備と位置付けられている。「1年生の最初のフォルメンは子どもたちの学ぶレディネス(学習に必要な条件がそろっている状態)が今どういう状況にあるかを担任が把握する」狙いもある。

先生が黒板に書いたものを、そのままノートに書き写すことは入学したばかりの1年生には容易ではない。特に抽象的な線は、黒板からノートに視線を落とした途端、黒板に書かれたものを忘れてしまう子どもも少なくないといい、フォルメンで状況を見ながら、担任教師が子どもたちの学ぶ力を測る。

フォルメンは、4年生まで最低年30こま(1こま=100分)の授業時間をとって、繰り返される。1年生はシンプルな直線と曲線から始まるが、2年生は線対称、3年生は四面対称、4年生は縄模様のような立体と、学年が進むにつれてどんどん複雑な幾何学模様になっていく。長井先生は「シンプルな斜めの線、等間隔の線など徐々に難易度が高まり、美しくなっていく。平面で成し遂げられるあらゆる空間感覚を発達段階に合わせ経験する。子どもたちはやっただけの達成感を得ていますよ」と話す。

物語と芸術

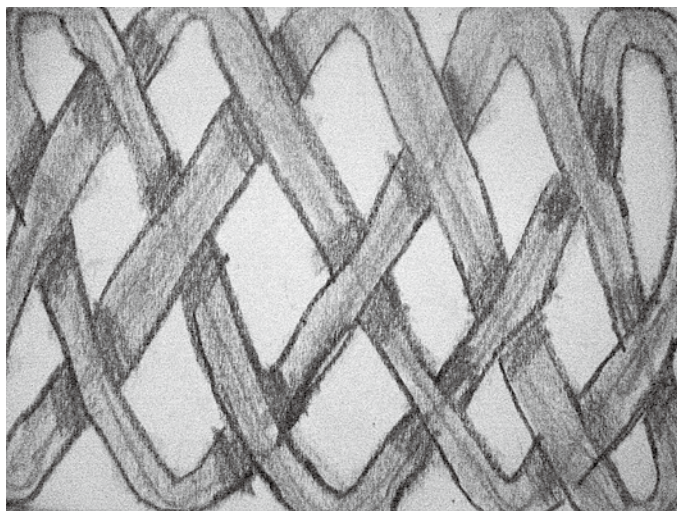
こうして最初のフォルメンの授業を終えた学園1年生は今、平仮名の前に漢字を学んでいる最中だ。例えば、三つの山の絵から「山」という漢字ができたように、象形文字から漢字の成り立ちを学ぶプロセスは子どもたちにとっても分かりやすい。「山」「川」などは、多くの公立校でも絵から学ぶ手法を採り入れているが、学園は全ての文字について絵から入るのが特徴だ。

シュタイナー教育では、文字は人類が長い営みの中で最後に到達した結晶であり、柔らかい感性を持つている子どもにも、抽象的な記号である文字を機械的に教えることをよしとしないからだ。できるだけ具体的に、子どもたちの想像力に訴え掛ける形で、芸術体験を通して教えるべき、と考えられている。

想像力に訴えるために用いられるのが、教師一人ひとりが苦心して紡ぐ物語だ。長井先生の場合は、4000年前に暮らしていた中国の羊飼いの子どもたちの物語だ。そこに広がる平原、後ろにそびえる山々、沈む夕日や少年たちがたいている火の絵を一つの場面にまとめ、黒板いっぱい描いた。子どもたちはその絵を自分のエポックノートに書き写していく。翌日からは、描いた風景の一部を取り出しながら「お日さまの日」「山々の山」のように絵から漢字へ一文字一文字丁寧に変化させた。

「まるで字みたい」。クラスの一人がつぶやいた。

■2012年(平成24年) 5月25日 内外教育 第3種郵便物認可



4年生の模様描きノート

た。子どもたちはここで初めて文字を習ったことを知った。「日」を学んだ翌日の休み時間、教室の窓を開けてみると、校庭と隣家との境の壁に粘土状の土で書かれた「日」の落書きが幾つも並んでいた。長井先生は記号である漢字を、芸術的な方法で子どもたちの心に根付かせることに成功した。

シュタイナー教育は「絵から入る」など方法論だけが一人歩きしがちだが、子どもたちにどう伝えるかは教師一人ひとりに任ざされており千差万別だ。

長井先生は羊飼いの話を聞いたが、次の1年生の担任が前年を踏襲することはない。

「踏襲すれば形骸化する。それではシュタイナー教育ではなくなります。知恵を振り絞り、ファンタジーに至るまでの教師一人ひとりの、目に見えない葛藤こそがシュタイナー教育です」と長井先生は強調する。

6月下旬からはやつと平仮名が始まるが、それも母音とその他幾つかの文字だけ。学園では平仮名についても漢字同様、全て象形文字から導入する。「え」は「衣」から、「お」は「於」から、という具合だ。長井先生は平仮名についても、全て漢字で書かれている古文書を、主人公が平仮名に変換するヒントを集めながら内容を読み解くという設定で、物語を進めた。

都内の公立小学校で、象形文字から漢字を導入しているという、1年生担任の女性教諭は「1年生の子どもたちは平仮名より漢字が好き。漢字を読み書きできるようになると、小学生になったと実感できるようだ。ただ、80の配当漢字を覚えるのに精いっぱい。とても全て絵から導入する時間はない」と話す。

確かに、全ての文字を絵から導入しては時間がかかる。学園で平仮名を全て教え終わるのは1年生の3学期ごろだといい、それまで自ら読書をすることもできない。文字が基本である以上、他の教科の学習にも影響しかねないのではないだろうか。毎月クラスごとに開かれる保護者会では、先生が保護者に現在の学習内容とその意図を説明

しているが、あまりに悠長な授業進度に、しびれを切らし始める親もいる。「こんなのんびりしたペースで本当に大丈夫なのだろうか」と。

ところが、最初の漢字「日」を学ぶのに3日かけた長井先生のクラスは、5年生の3学期で、国の学習指導要領が配当している6年生までの1006の漢字を全て習得した。3年生の2学期からエポック授業とは別の「練習の時間」を使い、本格的に漢字を学んだ。その際も漢字の成り立ちには必ず触れた。子どもたちは加速度的な学習内容の増加について行った。

指導要領の学年ごとの配当漢字にとられない分、偏が同じ漢字を幾つか合わせて覚えるなど、学習にまとまりを持たせることができたという。書き順や「止め、はね、払い」など文字の形を的確に再現する力は、執拗なまでに取り組んできた模様描き、フォルメンが効果を発揮した。

「それ以上に」と、長井先生は言う。「学ぶことに疲れさせない、学ぶ意欲を損なわずに、成長を促した結果ではないでしょうか。低学年でゆつくりしたアプローチをとる、シユタイナー教育そのものにより、次に学ぶ字を楽しむことができるようになった」

他教科の言語活動が補完

指導要領によると、小学校国語の授業時数は1年生が306時間、2年生が315時間、3、4年生が245時間、5、6年生が175時間Ⅱいずれも1単位時間は45分Ⅱ。各教科の中で最も多

く設定されている。1、2年生では全体の時数の3分の1を超え、5、6年生でも2割近くを占める。これに対して、横浜シユタイナー学園9年間の国語の授業は、どのような構成になっているのだろうか。

エポック授業の予定表などによると、2年生で文字(カタカナ)、3、4年の授業で文法や敬語の授業があるだけで、他に国語の授業らしきものはない。もともとドイツで生まれたシユタイナー教育を日本で実践しようとする、フォルメンのような独自科目に加え、世界史とともに日本史も必須となる。カリキュラムがいつばいいいづばいになり、国語の時間をどう確保するかが、まだ若い学園の悩みの種になっているという。

シユタイナー学校には、教科書がない。どの科目も先生が語る物語や読み聞かせが中心となり、板書を写したエポックノートが子どもたちの「教科書」になる。教科の垣根もない。言い換えると、全てが「総合学習の時間」になっている。歴史のエポック授業で先生の話聞いて文章にまとめたり、理科の実験の手順や観察記録を文章で表したりすること、指導要領が「聞く」「書く」領域の目標として定める「相手の意図をつかむ能力」や「目的や意図に応じ文章に書く能力」を培っている。各教科で行われる、いわゆる「言語活動」が国語の授業時数の不足を十分補っている、という訳だ。

これに加えて、各教科のエポックノートに書かれる文章は低学年の間、品詞ごとにクレヨンで色

分けられて書かれる。名詞は青、動詞は赤、助詞は緑、形容詞はオレンジ色という具合だ。その際、それぞれの色が示す意味を説明することは決してしないが、子どもたちは単語の役割を無意識のうちに学ぶことになる。これは、3、4年生以降に学ぶ文法の学習にもつながっていく。

国語のもう一つの領域である「読む力」はどうなっているのだろうか。学園には読むべき教科書がない。まずは聞くことに集中する素地が整うまで、読書も3年生までは推奨していない。公立学校では読書習慣を身につけさせようと「朝読書」と称し、毎朝10〜15分、全校児童が読書をする時間を設けている学校が多くあるのとは、明らかに異なる。

「ほっておくと、1日に3冊でも4冊でも本を読んでいるので、今は制限している」「学校で習ったことに興味を持つと、それに関連する本を欲しがったり、図書館で借りてきたりして、どんどん読んでいる」。読書が「解禁」となった4年生以上の子どもの保護者たちの声だ。長井先生は「もちろん人にもよりますが、子どもたちの読書量は半端ではないようです」と言う。

学園ではテレビやゲームについては、特に低学年は原則禁止。読書が解禁された4年生以降、子どもたちの興味は数少ない娯楽でもある本に、自然と向かう。本の横には辞書が置いてある。学園の授業で「読む」ではなく「書く」ことに徹した結果、「読む力」は特別の訓練を要せず、身につけているようだ。(田橋秀之Ⅱ内外教育編集部)